

# 権力と結びついたカトリック教会への挑戦

— クレイジー・ジェーン詩群におけるイエイツの試み —

河 合 利 江

W. B. Yeats (1865-1939) は1929年から1932年にかけて、Crazy Janeという女性が登場する七編の詩を書いているが、これらの詩は性を赤裸々に語る老婆ジェーンと、カトリックの司教とのやり取りがさまざまなテーマを投げ掛ける。アイルランドは1922年に長いイギリスの植民地支配から脱却し、イエイツがクレイジー・ジェーンの詩を創作していた当時は、自治権を獲得して新しいアイルランドを模索している最中であった。自治権を得て、アイルランド自由国が成立してからというもの、アイルランドではカトリックの権限が急速に強くなり、教会はことさら性の秩序を重んじた。そのため、避妊や墮胎、離婚の禁止 (1925)、性の秩序を乱すような出版物を取り締まるための検閲に関する法律 (1929) が立案された。そのような状況下で、自由国の上院議員であったイエイツはそれらの法律に反対の立場をとり、カトリックに支配されていくことに非常に危機感を抱いていた。そして、作家としてのイエイツは、教会から明らかに非難を受けるような詩を多数発表している。クレイジー・ジェーンが登場する詩においては司教の説教に対してジェーンに反論させるだけでなく、当時のカトリックの姿勢を非常に意識しつつイエイツは自らの思想を展開して見せている。そこで、本稿では一連のクレイジー・ジェーンの詩で、イエイツがジェーンという女性の仮面を付けてカトリックと対立するような自らの思想を語っていることに注目し、特殊な時代背景の中で彼のカトリックに対する感情を探り、ジェーンと司教に課した役割が何であったのか考察したい。

## I. クレイジー・ジェーン像とジェンダー批評

クレイジー・ジェーンとは19世紀末のイギリス、アイルランド文学に共通の性格をもって登場する架空の人物である。様々な絵画や文学の中で繰り返し用いられ、その人物像はというと、男性に誘惑され、その後捨てられて気が狂ってしまう哀れな若い無垢な女性で、男性話者に憐愍の情をもって語られるといったものであった。しかし、イエイツのクレイジー・ジェーンは全く性質が異なる。イエイツはクレイジー・ジェーンに娼婦、魔女、性的欲望を持った老女のイメージを付け加え、その女性自身に語らせている。伝統的なクレイジー・ジェーンが当時の人々に哀愁と同情をもって受け入れられたのとは対比的に、これらのイメージは話題にすることすらはばかる存在、もしくは排除されるべき存在としての女性を表すものである。フェミニズムの視点からすると、それらのイメージは、当時の社会の規範から外れた女性や、家父長制度を揺るがす、男性にとって脅威的な女性に貼られるレッテルといえる。イエイツは伝統的なクレイジー・ジェーンがどういうものであるかということ認識しつつ、意図的に語る力を持った主体的な人物像に作り替えていることから、女性を固定観念的に他者として扱う当時の価値観に一石を投じる役割を果たしたという見方が一つの解釈として存在する<sup>1)</sup>。

イエイツが女性の仮面を付けて語るということにはこれまでさまざまな批判がなされてきた。

しかし、エリザベス・カリングフォードは*Gender and History in Yeats's Love Poetry* (1993) の中で一連の“A Woman Young and Old”の詩についてイエイツがバラッド形式を用いて女性話者に語らせていることに着目し、再評価を試みている。元来バラッドは盲人や女性たちによって歌い継がれてきたもので、正統派の文学ではない非正典であるという定義に基づき、カリングフォードはこの論を用いて、イエイツがオーサーシップを自らはぎ取り、自己検閲から自由になるためにバラッドを用い、女性話者に語らせていると主張している。(233-234) なぜなら、ビクトリア朝社会の善悪の価値基準が、当然イエイツの中にも文化的な擦り込みとして存在しており、すでに世に認められた詩人が、その価値基準を越えて詩作するのは容易ではないからである。クレイジー・ジェーンの詩もバラッド形式であり、イエイツはジェーンという女性話者に語らせていることから、カリングフォードのこの論がクレイジー・ジェーンの詩にもあてはまると考えられ、先に述べたように、さまざまな他者性を付与されたクレイジー・ジェーンの主体化という解釈が成立するわけである。しかし、このジェーンの言葉をイエイツから離れて女性の声として批評すると同時に、イエイツその人の声としてこれらの詩を読み取っていく作業もアイルランドの独立過渡期という特殊な歴史的事実からして不可欠であると考えられる<sup>2</sup>。そこで、アイルランド自由国が1922年に成立してからのイエイツとカトリック教会との関係に着目し、クレイジー・ジェーンがイエイツその人の言論に限りなく近い存在であり、カトリックの倫理観とイエイツの思想を対照させることで、新たな視点を提供することを試みようと思う。

## II. アイルランドにおけるカトリックの歴史とイエイツ

アイルランドは聖パトリックが432年に布教を開始して以来、徐々に土着の宗教を吸収していき、カトリック教徒が大多数を占めていった。カトリックは旧約聖書からもうかがわれるように女性は男性を誘惑して破滅に導く罪深い存在として、アイルランドの女性は抑圧され続けてきた。イギリスの植民地支配を受けてきたアイルランドでは、イギリスが1534年にローマカトリックと絶縁して、国教会を設立してからというもの、カトリックに対する弾圧が始まった。カトリック教会の勢力は表向きには弱まったものの、19世紀末から20世紀初頭に独立の機運が高まるとイギリスに対する反発から再び勢力を盛り返した。この現象を大野光子氏は『女性たちのアイルランドーカトリックの〈母〉からケルトの〈娘〉へー』で次のように分析している。

カトリック信仰とアイルランド語の禁止が、イギリス政府による政治的抑圧の手段であった中で、逆な意味で、カトリック信仰とアイルランド語の使用を継続することは、アイルランドにとっての政治的反抗の手段でもあり、政治的団結の手段でもあった。(大野 114)

イギリスの抑圧が強ければ強いほど、アイルランドの人々は、その反動でカトリックと愛国心を結びつけて信仰心を篤くしていったのである。そしてカトリック教会は、独立(1937)を前提としたアイルランド自由国が承認されてからは、絶大な影響力を新政府に対して持った<sup>3</sup>。そのような折り、アイルランドを諸外国に対してどう特徴付けるかが課題となり、アイルランドが目指したのは、性に対して潔癖というものだった。なぜこのような方向に向かっていったのかという原因については、やはり独立運動時代に起因する。

「残虐なジョン・ブル（イギリス）に対し、アイルランドは陵辱された美しい処女という、紋切り型のイメージが出来上がった。そしてアイルランドの男性なら彼女を窮地から救い出すのが努めであるとされ、ナショナリズムがかきたてられ、戦意がかき立てられたのである。……このイメージが厄介なのは、聖母マリア賛美と一体化することによって、もっぱら受動的な母であることを女性達に強いて、彼女達から女性としてのセクシュアリティを奪い取ったことであった。」(大野 129-130)

大野氏が指摘しているように、独立運動時代に形成された自国に対するイメージをそのまま自由国の女性に押し付けたと言える。避妊や離婚が禁止され性的に不道德とされる出版物を取り締まるための検閲に関する法律も立案された。当然、女性に対してことさら制約が大きく、男性の雇用を確保するため女性は雇用の機会さえ狭められた。

イエイツは、セクシュアリティを追放しようとする自由国成立後のカトリックの姿勢に疑問を抱いており、1930年の日記に“To-day the man who finds belief in God, in the soul, in immortality, growing and clarifying, is blasphemous and paradoxical.” (*Explorations* 334) と書き記している。イエイツ自身はプロテスタントであるが、宗派の違いが問題なのではなく、カトリックに異を唱える原因として、アイルランドを間違った方向に導いていることに対する危機感があったと言えるのではないだろうか。イエイツはアイルランド自由国の上院議員の任期中、離婚の禁止や、検閲に反対の立場をとっていた。そのような状況の中で書かれていたのが *The Winding Stair and Other Poems* である。この詩集に収められている、“A Woman Young and Old”の一連の詩やクレイジー・ジェーンの登場する詩は、女性がセクシュアリティを赤裸々に語るという共通点を持っている。この点に関して、Marjorie Howes は *Yeats's Nations: Gender, Class, and Irishness* (1996) の中で“A Woman Young and Old”の分析において、イエイツがセクシュアリティを女性に語らせる意図を次のように主張している。

The female sequence is part of Yeat's critique of Irish Catholicism's vulgarity and his effort to formulate an alternative metaphysics in which the mystic way and sexual love use the same means. (143)

女性がセクシュアリティを語るということは、カトリックではタブーであり、イエイツはそれを彼の詩の中で語らせることにより、カトリック教会に批判的な態度を表明しているのである。

イエイツはジェーンにセクシュアリティをより明確に語らせているが、それでは、イエイツはクレイジー・ジェーンのペルソナを通して、奪われた女性のセクシュアリティを奪還しようとしたのであろうか。セクシュアリティは、クレイジー・ジェーンの詩の中で、非常に重要な中心的テーマではあるが、司教を登場させ、カトリックとの対立関係を明確にしていることから、それだけにはとどまらない別の意図が存在しているように思われるのである。

クレイジー・ジェーンの詩で、イエイツは当時支配的であったカトリック教会の画一的な倫理観に対立するイエイツ自身の思想を展開して見せており、そこにイエイツのアイルランドを代表する作家としての使命感が垣間見られてならないのである。そこで、これらイエイツの思想をクレイジー・ジェーンの詩の中から指摘し、果たして、イエイツは女性からセクシュアリティを奪ったということで、反カトリックを掲げているのかどうか彼の真意を探っていくことにする。

### Ⅲ. クレイジー・ジェーン詩群におけるカトリック対イエイツ

イエイツはクレイジー・ジェーンの詩の中でカトリックに対抗して、さまざまな対立物を提示して見せている。ジェーンと司教の対立に始まり、肉体と魂、清と濁というテーマを柱に、7編のそれぞれの詩に必ず何らかの対立物が存在する。それらは、カトリックを非常に意識したもので、カトリックの教えでよしとされているものに対抗するかのような考えをクレイジー・ジェーンを通して提示している。しかし、それらは単なる対立には終わっていないのである。

一連のクレイジー・ジェーンの詩の第一番目にあたる、“Crazy Jane and the Bishop” (VP 507-08) では、“the solid man” と “the coxcomb” という対立が存在する。この詩は4連で構成されており、それぞれの連の最終行に “The solid man and the coxcomb.” という誰の声とも言えない合いの手が入る。この詩のはじめのうちは、“the solid man” は、「厳格な」司教を表し、“the coxcomb” はジェーンと肉体的な愛におぼれた「軟派な」ジャックのこととして表しているのだが、第3連でジェーンによって司教の肉体的醜さが鳥のイメージで語られ、“But a birch-tree stood my Jack:” と性的な連想を伴うジャックへの言及で、完全に “the solid man” がジャックとなり、“the coxcomb” が司教となる。ジェーンの語りによっていつの間にかどんな誘惑にも屈しない、禁欲的で厳格な性格を表していた “the solid man” が性的な意味に置き換えられていき、司教もその精神を描写していたはずが、肉体的描写にすり替えられていくのである。

6番目の詩の “Crazy Jane Talks with the Bishop” (VP 512-13) では、司教がジェーンに年老いて肉体的にも衰えてきているのだから “foul sty” ではなく “heavenly mansion” に住むように、と諭している。ジェーンは恋人のジャックのほかにもさまざまな男性と関係を持ち、カトリックでは非難されるべき女性として描かれているのである。司教の意味する “heavenly mansion” とは、肉体の汚れから無縁の精神的な崇高さのことであろうが、対するジェーンは、“But Love has pitched his mansion in/The place of excrement;” と言って “mansion” の意味を排泄の部位という肉体的なものに変えてしまう。このようにイエイツはジェーンの口を借りて、カトリックで肯定されるようなキーワードを巧妙に性的な意味に引き込んでいくのである。

2つの連で構成されている2番目の詩 “Crazy Jane Reproved” (VP 509) は、第一連と、第二連に対立関係が存在する。第一連は、恐ろしい稲妻や嵐は天の怒りであるという考えに対し、ジェーンは “Heaven Yawns” に過ぎないという。つまり、人間は自然現象の猛威を神の怒りだとして恐れるが、それは偶発的で、気まぐれに起こるものだと主張しているのである。そして、ギリシャ神話を持ち出して、“Great Europa played the fool/That changed a lover for a bull.” と言い、ギリシャ神話の女神でも性欲の盛んな “bull” を選んだのだから、私がジャックを選ぶのも無理はないと、ジェーン流の解釈をして、自分の行動を正当化しているようである。それに対し、第二連では “mother-of-pearl” を飾り付けることが “Heaven Crack” を繕うことだという。つまり美しい小さな行いの一つ一つが天の怒りを静めることだと主張しているであろう。この第二連の話者は、誰とは書かれていないが、ジェーンに対しジャックのことは忘れて善行を積みと戒めていることから、やはり、司教の声ととらえるのが妥当ではないだろうか。この詩も、対立関係を提示するのみで終わっているわけではない。各連の最終行に “Fol de rol, fol de rol.” という合いの手が入り、対立関係の解消に使われているのである。イエイツ自身は、この言葉自体に意味はないと言っているが (ASD 30-1)、語感的にどのような感情によ

る言葉なのかは確認しておく必要がある。『W・B・イエイツ全詩集』(1982)の訳者である鈴木弘氏は「ホッホッホのホッホッホ」(160)と訳しており、「リフレンには、その説教をあざ笑うジェーンの気持ちが反映している。」(317)と解説している。また、佐野哲郎氏は『W. B. YEATS』(1981)の中で、「意味がないだけにかえって不気味な迫力を持ちうるし、また、こちたき議論を笑い飛ばして、存在そのものを誇示することもできるのである。」(26)と指摘している。つまり、第一連のジェーンの神を恐れない発言に対し、第二連でジェーンが“reprove”されるのだが、改心するわけでもなく、再び反論するわけでもなく、全く意に介さない。ジェーンに無関心な態度を取らせることによって、この2連の対立関係を解消する役割を与えているのである。

イエイツは、また、カトリックの教義からは排除されるべき対立物に別の要素を取り込んで、カトリックとの二項対立を解消させている。第5番目の詩、“Crazy Jane on God” (VP 512)では、恋人のジャックの他に、夜ごとの恋人を登場させる。ジャックとジェーンの関係は、精神的にも肉体的にも愛し合っているのだが、おそらく、結婚という形態をとっていないので、司教には、獣同士だと非難される関係である。カトリックでは、性は夫婦間に限られているので、制度を無視して愛し合うジェーンとジャックは、その対極にあると思われる。しかしイエイツは、さらに夜ごとの恋人を登場させることによって、肉体だけの愛を提示し、多様な愛の形を展開して見せ、ジャックとジェーンの関係が非難されるべきものであるというカトリックの倫理的判断を牽制しているかのようである。

また、第7番目の詩、“Crazy Jane Grown Old Looks at the Dancers” (VP 514-15)では、この詩のできた思想的背景に対立物が存在する。イエイツはこの詩が、ブレイクの肉体的な愛は精神的憎悪を土台とするという思想に基づいている、と友人のオリビア・シェークスピアに語っている。(Letters 758) イエイツは、精神と肉体というカトリックでは対極を表すテーマに、さらに愛と憎しみという観念を組み合わせることによって精神と肉体を切り離せない関係に置き、それぞれの対立物を1つに内包しようとしたと言える。

イエイツはまた一方の存在が他方の存在意義につながるという対立関係も多く提示している。第4番目の詩“Crazy Jane and Jack the Journeyman” (VP 511)では、第二連において“tomb”と“womb”という対立が脚韻を踏むことによって提示されている。from the womb to the tomb という慣用表現があるように、この二つの概念は一般的には生と死を象徴しているが、この詩においてジェーンは死後は母の子宮に飛び出すと言っており、イエイツがこの二つの概念に象徴させているのは死と再生であることがわかる。キリスト教においては死後は神のもとに召されるわけであるが、ジェーンは“A lonely ghost the ghost is/That to God shall come;”と言って神のもとに行くことを拒み、ジャックと亡霊同士でさまようか、生まれ変わると言う。つまり、イエイツの提示する「死」はすなわち、「生」なのである。この思想はイエイツの歴史観、世界観を著した *A Vision* でも顕著に見られ、生は死の始まりであり死は生の始まりであるという永遠のサイクルの中にこの二つの対立を解消させているのである。

第3番目の詩の“Crazy Jane on the Day of Judgment” (VP 510)では、クレイジー・ジェーンの詩を書く以前にもイエイツが好んで用いた肉体と魂という対立のテーマを次のようにジェーンに語らせている。

'Love is all  
Unsatisfied

That cannot take the whole  
Body and soul';  
and that is what Jane said.

肉体と魂の両方を受け入れる愛でなければ満足できないというジェーンの言葉は、肉体と魂を切り離して考えることはできないというイエイツの思想の反映である。この考えは第6番目の詩“Crazy Jane Talks with the Bishop” (VP 512-13) でも明確に表されている。ジェーンは、精神の崇高さを説く司教に対して、互いに切り離すことのできない対立物をいくつも示すことで対抗する。

'Fair and foul are near of kin,  
And fair needs foul.' I cried.  
'My friends are gone, but that's a truth  
Nor grave nor bed denied,  
Learned in bodily lowliness  
And in the heart's pride.

“fair” と “foul” は肉体と魂が切り離せないという考えを示すとともに、魂は崇高なもので肉体は汚れているという観念をも否定している。“grave” と “bed” の対比は、単純に死と生を意味するだけでなく、精神の安らぎの場と肉体の快楽の場を象徴しつつ、そのどちらの存在も真実で否定したり、回避できないのである。ジェーンはそのことを “bodily lowliness” と “heart's pride” から学んだと言っており、肉体の汚れを極端に排除しようとした当時のカトリックの姿勢とは対照的に、両方を内包したところに真実があるというイエイツの立場が示されている。

#### IV. 結論

このようにイエイツは、クレイジー・ジェーン詩群において、カトリックと対立し相いれないと思われる要素を提示しているが、それらの価値を逆転させたり、他の要素を取り込んだり、対立する二つのものが実は分かっことのできない一つのものであるという例を示して対立関係を解消している。この関係は、カトリック対文学という対立関係を司教とジェーンという人物によって具現化したものであると言える。イエイツは、アイルランド文芸復興の折り、キリスト教の影響を受ける以前のケルト文学にアイルランド人としてのアイデンティティーを求めたが、カトリックはアイルランド人の文化や生活の強い基盤である。イエイツの意図は、カトリック教義そのものを根本的に否定するのではなく、画一的で、偏ったカトリック教会の教義解釈を文学作品に押し付けられることに反発し、文学の多様性を求めたのである。もちろん、クレイジー・ジェーン詩群の解釈がここにすべて満たされているわけではない。しかし、アイルランド自由国という政治的に微妙な位置にある国の特殊な社会状況を考慮に入れて、これらの詩を読んだとき、イエイツは上院議員として、また、ノーベル文学賞を受賞し、世界中が認めるアイルランド文学の指導者として、宗教と文学の境界を明確に分離し、文学が何ものにも縛られることのないよう独立後の過渡期のアイルランド文学が目指す方向性を示唆したといえる。そして、カトリック教会が文学に対してさまざまな制約を加え、その支配下に置こうとしていた時代に、イエイツはジェーン

と司教という登場人物に文学対カトリックという対立関係を提示し、ジェーンにその対立関係が実は対立ではなく構成要素の一部であることを語らせ、カトリックをも文学の中に取り込んでしまおうという試みだったと考えられるのである。

## 注

<sup>1</sup>この解釈に関しては拙論、「Beyond Idols of Male Literary Tradition: The Woman Having Power of Speech in Yeats's Crazy Jane Poems」 *The HARP* Vol.11., 1996. を参照。

<sup>2</sup>クレイジー・ジェーンの声イエイツ自身のもので分析するとき、『終末のヴィジョンーW・B・イエイツとヨーロッパ近代一』において、鈴木聡氏が主張しているように「表面的には女性のものだとされる声、形式的にも男性たる作者によって収奪され、常識から見れば不穏当とされるであろう発言を行う口実として利用されている事実は隠しようがないのだ。」(鈴木聡 220) という指摘を考慮に入れなければならないが、ジェーンの語りは「不穏当」ではないということを以下の考察で明らかにしていく。

<sup>3</sup>Terence Brownによれば検閲の法制化に向けて世論を動かしていたのは政治家ではなく Irish Vigilance Societies と Catholic Truth Society of Irelandであった。(69) Howes は、Eamon de Valera の1937年の憲法にカトリックの道徳観が影響していたことを指摘している。(135) Hussey は独立後アイルランド共和国の党首となる Sean Lemass が1925年には *Irish Independent* でカトリックに敵意ある内容の文を寄稿したが、共和国成立の1937年までにはカトリックの政治的影響力を擁護する意見に変わった(382)と、指摘している。

## 引用文献

- Cullingford, Elizabeth Butler. *Gender and History in Yeats's Love Poetry*. New York: Cambridge UP, 1993.
- Howes, Marjorie. *Yeats's Nations: Gender, Class, and Irishness*. New York: Cambridge UP, 1996.
- Hussey, Gemma. *Ireland Today: Anatomy of a Changing State*. Dublin: Town House, 1993.
- Brown, Terence. *Ireland: A Social and Cultural History 1922-1985*. London: Fontana, 1985.
- Yeats, W. B. *The Variorum Edition of the Poems*. Ed. Peter Allt and Russell Alspach. New York: Macmillan, 1957.
- , *Ah, Sweet Dancer: W.B. Yeats & Margot Ruddock, A Correspondence*. Ed. Roger McHugh. London & Basingstoke: Macmillan, 1977.
- , *The Letters*. Ed. Allan Wade. London: Hart Davis, 1954.
- , *Explorations*. Sel. Mrs. W.B. Yeats. New York: Collier, 1962.
- 大野光子『女性たちのアイルランドーカトリックの〈母〉からケルトの〈娘〉へー』平凡社、1998.
- 佐野哲郎『W. B. YEATS』山口書店、1981.
- 鈴木聡『終末のヴィジョンーW・B・イエイツとヨーロッパ近代一』柏書房、1996.
- 鈴木弘 訳『W・B・イエイツ全詩集』北星堂、1982.